

夕焼けとアジのしっぽ

冷たいコンクリートのすきま風が、トラのヒゲをかすかにゆらした。トラは、もう若くはない野良のオス猫だ。夕焼けが空を真っ赤にそめているけれど、その色はトラのお腹を満たしてはくれない。

「ぐうう……」

情けない音が、自分のお腹から鳴った。今日一日、まともに口にしたものといえば、公園の水道の、ぬるい水だけだ。

「……まったく、ついてない日だニャ」

トラがため息をついた、その時だった。

ガサ、ガサガサ……。

トラは、ぴたりと動きを止めた。耳をすます。公園のしげみだ。ネズミか？いや、もっと大きな音だ。

トラは、しなやかに体を低くし、音のする方へとにじりよった。しげみのかげから、ゆっくりと白いかたまりが姿をあらわした。

「ウサギ……？」

それは、大きな、白いウサギだった。ペットとして飼われていたのだろうか、毛並みはところどころ薄くなっていたが、昔はきっと真っ白だったにちがいない。そのウサギは、トラの気配に気づくと、ビクリと体をふるわせた。

「お、おどかさなくてくれんかのう」

ウサギは、しわがれた声で言った。よく見ると、目は白くにごり、足取りもおぼつかない。かなりの年寄りらしい。

トラは、ねこパンチをくりだす気にもなれなかった。こんな年寄りのウサギ、捕まえたところでおいしそうにもない。

「あんたこそ、何してるんだ。こんな暗くなりそうな時に」

トラは、そっけなく言った。

「……何か、食べるものを探しておるんじゃよ」

ウサギは、ユキマルと名乗った。彼もまた、トラと同じように、お腹をすかせていた。

「わしもじゃ。だが、今日はどうにも見つからん」

ユキマルは、力なくしげみの根元にあった、かたい草の葉をかじろうとしたが、すぐにペツと吐き出した。

「まずいのう……。若いころは、これしきの草でも、おいしく食べられたもんじゃが」

二匹の間に、気まずい沈黙（ちんもく）と、お腹の鳴る音だけがひびく。

「……なあ」

しびれを切らしたのは、トラだった。

「どうせ二人とも、腹ペコなんだ。一緒に探さないか？ そのかわり、見つけたら半分こだ」

トラにしてみれば、これは大きな「じょうほ」だった。猫は、たいてい一人で行動するものだからだ。

ユキマルは、白くにごった目で、じっとトラを見つめた。

「猫とウサギが、一緒に……？」

「文句があるのか？ じゃあ、一人で探すんだな」

トラがプイと横を向こうとすると、ユキマルはあわてて言った。

「いや、文句などない！ ぜひ、お願いしたい。わしはもう、目がよく見えんし、耳も遠くなってしもうた。猫さんの、そのするどい目と耳がたよりじゃ」

こうして、猫とウサギの、ふしぎな食べ物さがしが始まった。

「こっちだ」

トラは、鼻をクンクンさせながら、公園のゴミ捨て場へとユキマルをみちびいた。

「ここなら、人間の食べ残しがあるはずだ」

トラは、かるがるジャンプしてゴミぶくろの山に飛び乗った。

「お、おい、ユキマル。こっちだ。早く登ってこい」

「む、むりじゃ……。わしは、そんな高いところへは……」

ユキマルが、山のふもとでオロオロしている。

「ちっ、使えないジイさんだニャ」

トラが、するどいつめでビニールぶくろを破ろうとした、その時だ。

「カー！ カー！」

耳をつんざくような鳴き声とともに、二羽のカラスがゴミ捨て場の上にとまっていた電線から急降下してきた。

「あ、しまった！ 先客がいたか！」

カラスたちは、トラよりも体が大きく、くちばしもするどい。トラは、思わず身をすくめた。

「フン！ 新入りが、このシマを荒らすつもりか！」

「今日のゴミは、おれたちのものだ！」

カラスたちは、トラをいかくするように、ゴミぶくろをつつき始めた。

「こ、こまった……」

トラがしっぽを丸めていると、下からユキマルの声がした。

「猫さん、猫さん。あそこの、光るものを！」

「光るもの？」

トラがキョロキョロすると、ゴミ山のわきに、だれかがすてたジュースの空きカンがころがっていた。

「カラスは、どうやら光るものが好きらしい。あれで気を引けんかのう？」

「……なるほど！」

トラは、カラスたちに見つからないように、そっと空きカンに近づくと、前足で思いっきりそれをけとばした！

カラン！ コロカラリーン！！

空きカンは、夕焼けの光をはんしゃしながら、コンクリートの上で高い音を立ててころがった。

「お！ なんだ、あれは！」

「キラキラしてるぞ！」

二羽のカラスは、食べ物のことなどすっかり忘れ、いっせいに空きカンのほうへ飛んで行ってしまった。

「……やったな、ジイさん！」

「うむ。うまくいったようじゃ」

二匹は、カラスがいなくなったゴミ捨て場をあらためて調べた。しかし、カラスたちが荒らした後では、ろくなものは残っていなかった。

「パンの耳が、ひとかけら……」

「これでは、二人のお腹は満たされんのう」

トラは、その小さなパンの耳を、ユキマルの前にそっと置いた。

「とりあえず、これを食べよ。あんたのおかげで見つかったんだ」

「いや、猫さんこそ。わしはもう年寄りじゃ。君が食べなされ」
二匹は、おたがいにゆずり合った。結局、パンの耳は、トラが半分にちぎり、ユキマルのかれた口に押しこんだ。
「……うまい」
ユキマルが、ぽつりと言った。

お腹は、まだグウグウ鳴っている。
「こうなったら、商店街の裏通りだ」
トラは、立ち上がった。「魚屋に、八百屋。あそこなら、きっと何かある」

二匹は、暗くなり始めた道を、いそいで商店街へとむかった。
裏通りは、しずかだった。もう店じまいの時間らしい。
「あ、あのにおい……」
トラの鼻が、かすかな魚のにおいをかいだ。
「魚屋だ！」
二匹は、魚屋の裏口に近づいた。店の主人が、ちょうどバケツで床を洗い流しているところだった。
「だめだ。人がいる」
トラがあきらめかけた、その時。

主人が、残った水を「ザバーッ」と道にまいた。その水と一緒に、小さな魚が一匹、店の外へとすべり出てきた。
ピチッ、ピチッ！
銀色に光る、小さなアジだ！
トラとユキマルの目が、同時にかがやいた。
アジは、二匹からほんの数メートルのところに落ちている。しかし、店主がまだすぐそばにいる。

「どうする……」
トラがゴクリとつばをのんだ。
その時、ユキマルが、ゆっくりと動き出した。
「じ、ジイさん、どこへ行く！」
ユキマルは、トラの声にもこたえず、わざと店主の足元へと、のっそり、のっそりと近づいていった。

「おや？」
店主は、足元で動く白いかたまりに気づいた。
「なんだ、ウサギか。こんなところに。どこから逃げてきたんだ？」
店主が、腰をかがめてユキマルに手をのばそうとする。
（……今だ！）
ユキマルが作ってくれた、ほんのわずかな「すき」。
トラは、音もなく地面をけた。風のように走り、一瞬でアジをくわえると、そのまま一気に路地裏の暗がりへと飛びこんだ。

「おっと、どこかへ行っちゃったか」
店主は、ウサギを見失い、アジがなくなっていることにも気づかないまま、戸を閉めて店の中へ入っていった。

「……ハア、ハア。やったぞ、ジイさん！」
トラは、口にくわえたアジをはなして、ユキマルをむかえた。
「あぶないところじゃった」
ユキマルも、息を切らしている。
「あんた、すごいじゃないか。わざと店主の気を引くなんて」
「猫さんこそ。あのすばやさ、若い者にも負けん」

二匹は、路地裏の安全な場所で、アジを分け合うことにした。

トラが、器用につめでアジを半分に分ける。

「ほら、こっちの頭のほうがうまいぞ」

トラは、しっぽのほうを自分によこし、おいしい身がつまった頭のほうをユキマルの前に置いた。

「いいのかね？」

「ああ。今日の『さくせん』は、あんたの勝ちだ」

アジは小さかったけれど、二匹のお腹を満たすには、じゅうぶんだった。

久しぶりのごちそうに、トラもユキマルも、満足そうにヒゲをならした。

「ふう。食った食った」

「おかげで、今夜はぐっすり眠れそうじゃ」

ユキマルは、トラのそばに丸くなった。もう、猫をおそれる様子はない。

トラも、ユキマルの温かい毛並みを、まんざらでもない顔で見ている。

「なあ、ジイさん」

「なんじゃ？」

「明日も……一緒に探すか？」

「うむ。そうさせてもらおうかのう」

空には、まんまるい月がのぼっていた。

お腹がいっぱいになった二匹は、明日もきっと、今日よりおいしいものが見つかるだろうと、そんなことを考えながら、静かな夜の公園で、ゆっくりと目を閉じた。

おわり